山と博物館

第42巻 第12号 1997年12月25日 大町山岳博物館

冬の森にて

峯村 隆

雪がやんだ朝、結氷した湖にいく筋もの獣の足跡を見かけることがある。水べりまで行ったかと思えば、戻ってほかの足跡を嗅ぎ、跳びはねては蛇行する……。私もそうして、冬の森に足跡をつけることが好きだ。

容易に見通せる冬の落葉樹林の木々の配列と太さとは、個と全体、主張と協調、そして森の元気さを的確に教え、夏場にヤブ蚊に悩まされながら根元にたどりついた覚えのあるミズナラやブナの巨木は、その偉大さを縦横無尽に見せつけてくれる。

冬芽も楽しい。春を待つ芽と、葉の柄がついていた跡とが見せる「顔」たちは、時にユーモラスで、時に怖い。月並みにはオニグルミは猿や羊の顔、オオカメノキの花芽は兎、林縁のクズのそれは埴輪の人面のようなのだが、何に見えるかは科学的発想以前の各人の楽しみ……。冬芽たちは、理屈や知識で凍りついた私の頭をしっかり溶かしてくれる。

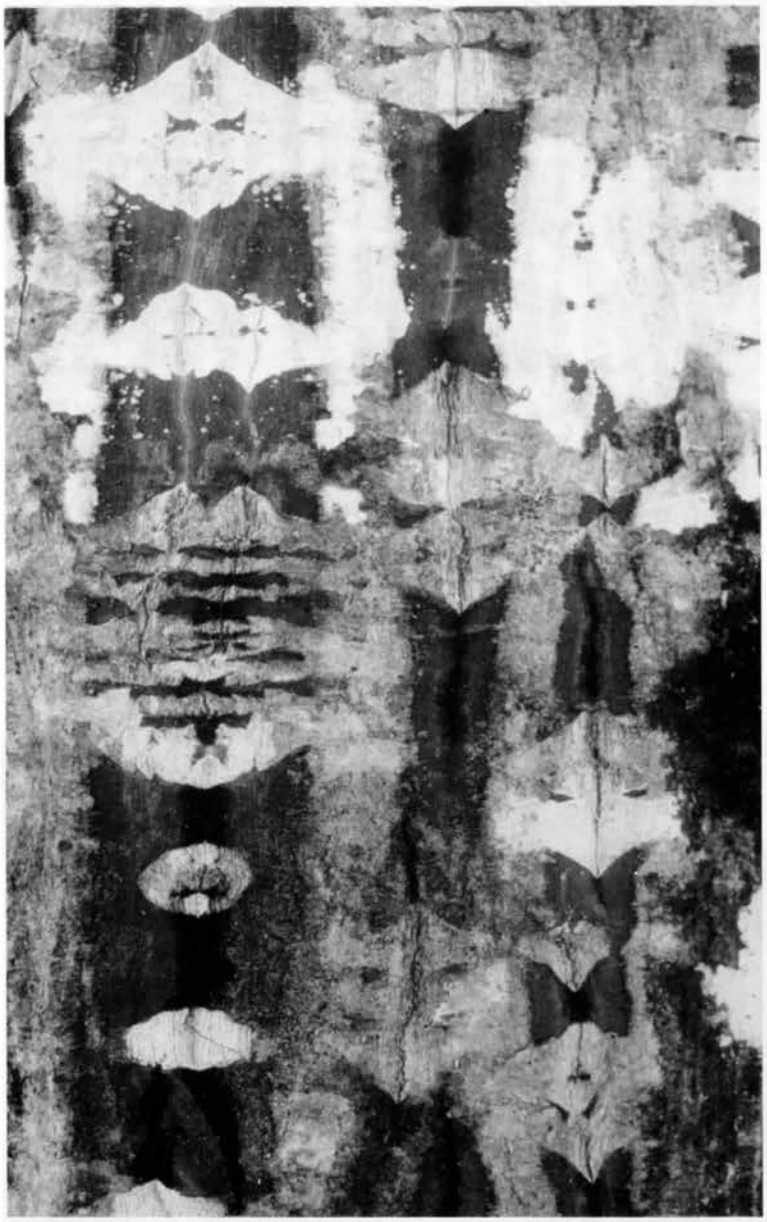
名も知らぬお気に入りの冬芽を見つけたなら愛称をつける。そして「君の名は……」と、芽吹きの春を待ちこがれずにはいられない。

写真はウリハダカエデの木肌である。森が緑の時季には木肌も緑ゆえに目立たず、緑の消えた冬こそ緑と白と黒の木肌を際立たせる。白い顔たちは実に様々に叫び、見つけてしまった私を見つめ続ける。

彼らの顔や目は、木の成長とともに変容し続けるだろう。老いつつもまた変容し続けるだろう私は、思い出したかのような、ある日の再会を楽しみにしている。

冬の森は、そんな刺激に満ちている。

（山岳博物館学芸員）



顔　撮影 峯村 隆

未踏峰に挑む
―チベット自治区　キズ峰（6079m）―

武田　武

西蔵（チベット）との交流

日本の屋根である長野県と世界の屋根西蔵との交流を、長い年月夢として暖めてきた。その夢が正夢として実現したのが、一九八一年であった。

「日本・中国合同登山技術研修一五周年」並びに「長野・チベット友好兄弟協定一〇周年」を記念して長野・西蔵合同登山は、八月一日から二四日までの日程で、チベットのニンチェンタングラ山群で行われた。

日中国交正常化一〇周年記念事業の一環としてスタートしたこの合同登山技術研修会は「交流の樹」と銘々し、交互に訪問し研鑽を積み重ね今年一五周年を迎えた。

中国でよく使われる古い諺で「水を飲むときは、井戸を掘った人の苦労を思え」と、また節目を重んずる国でもある。

目標の山と隊員構成

西蔵登山協会からの招聘状は、井戸を掘った人達を招き〝日中元老合同登山隊〟を組み、チベット自治区の未踏峰　キズ峰（6079m）を狙うというものであった。

この山は、西蔵登山協会がこの企画のために長野県山岳協会に提供してくれた未踏峰で、日中合同登山技術研修会実現のために最初に骨をおった人達との合同登山にふさわしいと総隊長の貢布氏（一九六〇年世界最高峰チョモランマ北壁初登頂者で、中国国民的英雄の称号を持つ）が自ら偵察し、決めてくれた名峰である。

日本側は、隊長の私が最高齢で六四歳を含む、苗を植えた六〇代が六人、水をやり大切に育ててきた五〇代が七人、肥料を与え枝葉をすくすくと伸ばし、さらに次代を担う人々への架け橋になるであろう四〇代が二人の合計一五人。チベット側は、貢布隊長が私と同じ年で、隊員は日本側とほぼ同じような年齢構成の七人で、合わせて二二人の日中合同登山隊で構成された。

登山の概要

私たち長野県山岳協会「キズ峰遠征隊」は八月一日、成田空港を出発。上海、成都を経て三日に拉薩（ラサ）空港に着いた。

拉薩市はチベット自治区の区都で、海抜が富士山に匹敵する3600～3700mの高所にある。そのためここでもう最初の高山病に悩まされる者が何人かでてくる。

空港には貢布総隊長が、カタ（白い襟巻きのような長い布で、お祝い・歓迎の時に衿にかける、ハワイのハイビスカスのレイと同様なもの）を持ち、自ら出迎えてくれた。

四日から六日の三日間は、登山に必要な小物、野菜など食料の一部を買い出し、また高所順応訓練にラマ教の総本山ポダラ宮殿や、ラサ郊外の4000m前後の山を使った。

ラサでは「日本元老登山隊熱烈歓迎」の横断幕で、西蔵登山協会主催の歓迎式典と祝宴が行われ、中国登山協会・西蔵登山協会・体育運動委員会の歓迎を受けた。なかには老朋友の何人かの顔がありなつかしく、本家に帰ったような気分であった。

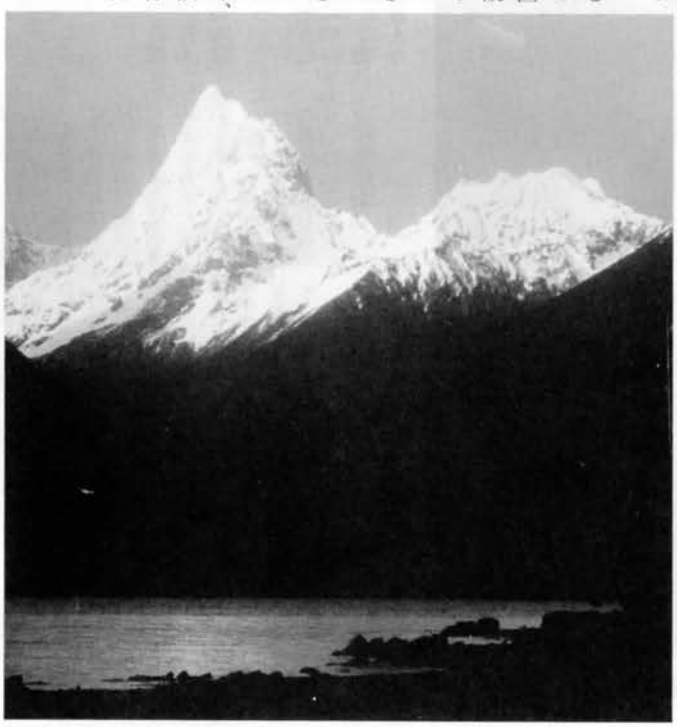
ベースキャンプ（BC　4600m）

ラサからランドクルーザーで二時間あまり、世界最大規模の地熱発電所がある羊八井（ヤンパーチン）村に着く。ここから車は大草原の中を進む。右手にはニンチェンタングラの峯々、左手には鹿島槍ヶ岳を一回り大きくしたような研ぎ澄まされた双耳峰ピッツ峰が銀色に光っている。行く手には気の遠くなるような広大な草原。その遥か彼方に純白の無名峰が連なっている。

この素晴らしい景観、環境の大草原の真っ直中にBCが建設された。標高4600m。

足もとの小さな植物たちは、一本一本が小さな花を着けている。ピンク系のものが最も多く、赤そして黄。強い紫外線の影響か紫色は特に目立つ。その中で白眉は何といっても〝青いケシ〟だ。私にとっては幻の花であった。ヒマラヤ歴三三年目にして初めて逢えた感激にシャッターの手が震える。何枚かのピンぼけネガが手元に残った。いい思い出でになる。

BCには、屋根型の大きいテントが四張りと、小さなテント四張りの一大テント村ができあがった。隊長テント、日本隊員テント、中国隊員テント、キッチンテントに振り分けられ、BCテントはゆったり快適であった。時々近くを通る遊牧民の牧童や遠く近く点在するカルカ（夏期間の遊牧民が使う石積みの仮屋）からは、生まれて初めて見る外国人と異なる言葉、装備、衣類が珍しく、目を引くのであろう、毎日、朝から暗くなるまで大勢の見物客が後を絶たなかった。滞在日数が多



未開放地区の八松錯湖とザンベラ峰

未解放地区のサマラサ（6304m）

くなるほど観客は増えてくる。最初の日に来た遊牧民の娘たちにポラロイドで写真を撮って与えた。鏡を見る習慣も鏡もない生活をしている彼女たちは、写真で見る自分の顔に驚いていた。

ところがその翌日からは写真を希望する住民が着飾って列をなした。見渡す限り民家らしい建物はないのだが……、どこからこんなに人が湧いてくるのか不思議であった。

第一キャンプ（CI　5350m）

BCの上部200mの場所に大きな尼寺があり、そこでは一〇〇人以上の尼僧が生活している。人里からは遥かに離れ、人臭い匂いも、声も、近代科学の光も、音もここ4800mの高所ではまったく関係がない。まさに陸の孤島での暮らしである。

尼寺では、登山の安全祈願祭をやってもらったり、BCからCIへの荷上げを尼僧に手伝ってもらった。

CIへのルートは、尼ゴンパの脇から岩稜を登り途中から沢づたいに登る高山植物の豊富な楽しい路だ。初めて見る植物も多い。

CIは、キズ峰氷河のモレーンの中で、氷河の伏流水が幅広く流れている平地である。ブルーポピンや岩蓮、湿潤な環境に育ったBCとは異なった高山植物の群落に、隊員は皆、桃源郷とはまさにこの所をいうのだと悦にいっている。

CIからは、キズ峰までのルートと頂上が指呼の間に望むことができる。偵察や高所順応などで六日間の滞在の間、夜はほとんど毎日雪が降り、多いときは30cm以上という日もあった。

CIテント村を流れる清流も朝は凍っていた。

第二キャンプ（CII　5850m）

CIからは、不安定な岩の連なるモレーンを登る。氷河の舌端、懸垂氷河に取り付くこからは、アイゼンとザイルに身を託した登攀となる。ヒドン（隠れた）クレバスも各所にある。

装備が重い。呼吸が苦しい。なんでこの年でこんな苦しい思いをしなければならないのかと、つくづく考えながらゆっくりゆっくり歩を上へ運ぶ。

酸素不足は夜も十分な睡眠がとれない。疲れているので眠い。うつらうつら眠りに入る。少し経つと呼吸が止まり（チェーンストップ）そうになる。急いで大きく深呼吸をするともとに戻るが、戻らなければ死んでしまう。身体が高所に順化してくるとこの現象はなくなってくる。寝ながら少しでも酸素を多く取り入れようと、枕の高さを変えたり、首の角度や頭の向きを変えたりと、楽になる方法を試みる。

登頂（6079m）

八月一六日、無線の交信で、CIから直接頂上を目指す組と、CIIからの元老組の二班に別れ、一日で一気に登頂する計画にした。

あいにく夜半から雪降りで、朝から濃い霧で視界がまったく利かない最悪のアッタク日となってしまったが、それでも早朝より行動が開始された。

昨夜来の降雪は30cm以上。その下は硬いブルーアイスで、ラッセルとアイゼンのコンビネーションの登攀は、雪崩と滑落に特に神経を使う。頂が近づくに従って傾斜はますます厳しくなってきた。アイゼン・ピッケル・ザイルに安全を確かめながら、一一時三〇分、隊長の私を先頭とする組がファストサミッターとなり、日の丸と五星紅旗が空に靡いた。CIからの若い組も間もなく着いた。

日本隊員一一人、中国隊員五人の、計一六人が交替で未踏峰の山頂に立ったのである。

頂上とそれに連なる稜線は反対側がすっぱり切れ落ちた雪庇になっているので、稜線に出るのは危険な状態であった。軟雪の下は蒼氷で、大人数だと割れる恐れがあり、四～五人が頂上に立つのが精一杯の広さであった。濃いガスと風のため頂上からの遠望はできなかったが、時折霧の晴れ間に、ルーツェ峰方面を望むことができた。

CIIからのキズ峰

県山岳協とチベット登山協友

キズ峰を背景に勢ぞろいした両協会の登はんメンバー（第2キャンプ）。登頂成功で両協会は新たな交流に踏み出した（8月16日）

信濃毎日新聞、1997.8.26より

世界の中で私が一番最初にこの未踏の頂きに足跡を印したという感動は、言葉で表すことなどとうていできない……。

チベット隊員はピークの最先端に香を焚いて感激と感謝を神に捧げていた。

頂上を共に踏んだチベットのロゼ副隊長は、一六年前に最初の使節団として来日して以来の「老朋友」であった。初登頂の喜びに肩を抱き合い、感動に震え、幸せな時を味わった。

登山と科学

一九五六年、日本隊がマナスルに初登頂した際、朝日新聞の天声人語氏は、「8000mのヒマラヤの登頂成功は、その国の総合した文化のレベルを示すものである。」と言っていた。

ヒマラヤのビックジャイアント級の登山には、衣食住のすべてにわたり科学の粋を集め、それを適切に使いこなす技術と能力を持った登山家がいて、初めて成されるものである。

今度の登山隊は、高度や規模からみて、大遠征隊ではないが、成功の影に科学の力があったと言っても過言ではない。

――科学機械――

ポジションメーターは有効であった。まだ正確な地形図もないこの地域では（もっとも周囲で生活をする人々にとっては必要としないのであろうが……）、アメリカの人工衛星からの信号は、緯度・経度・高度を知るのに役立った。

ビデオ・デジタルカメラ（NHK、SBCから預かったビデオカメラや隊員のデジタルカメラ）は、登攀ルート選定に威力を発揮した。資料のまったくない地域での、ルートの偵察にはずいぶん神経を使う。何組かの偵察隊が携えたカメラは、それぞれのルートの映像を確実にとらえ、BCに戻ってくる。再生画面を見ながら戦術会議を開き、登攀ルートを決定する。その場ですぐに見れるというのはすごい武器だ。

標高が高くなるに伴って、酸素は減少していく。このため、平地に住む人が高地に行けば、酸素が足りず呼吸数が増える。しかし、人間には適応力があり、肺に血液を送る心臓の右心室が大きくなり、肺循環機能を助けるようになる。

パルスオキシメーターはクリップのセンサーを指に挟むだけで瞬時に脈拍数と酸素摂取量がわかる計測器で、自覚症状では分かり難い高所順応の度合いを教えてくれる。数年前だと、一台が一抱えもある大きく重い計測器であったが、今は手のひらに入るほどの小型で高性能になり、ヒマラヤ登山に革命をもたらした。

各隊員には個人のカルテが渡され、毎日の測定値を基に、管理及び行動の指針とした。

デジタル最高最低温度計は、小型で屋内と屋外の二カ所の最高・最低温度を計測するもので BC に設置した。

チベットの夏から秋への移り変わりを的確に教えてくれる登頂成功の一助となってくれた。

この他にもいくつかの計器や、高山病予防対策の薬、貼るだけで鼻孔を拡げ呼吸率をアップするプラスチック・バー内蔵テープなどは、登攀中、睡眠中に特効力があった。

ヒマラヤの高所登山も、最初の三三年前と比較すると格段の相違である。近代科学の力を借りて、老兵でも登頂が可能であったのかと、文化の発展に感謝する。

（キズ峰遠征隊隊長
山岳博物館協議会委員）

証明書
Certificate

武田武 殿 1997年8月16日 11時20分 登頂成功 山頂の高さ 6206m 特記事項

This is to certify that, on 16th August '97 at 11:30 Am the CHINESE—JAPANESE joint Expdn. Mr. TAKESI TAKEDA has reached the altitude of 6206m Summit above sea level on an expedition to peak KOETSE of Mount Nanchen Tangla

中華人民共和国西蔵自治區登山協會
THE MOUNTAINEERING ASSOCIATION OF TIBET
AUTONOMOUS REGION OF THE PEOPLE'S REPUBLIC OF CHINA

1997年 8月 20

山と博物館第42巻第12号
一九九七年十二月二十五日発行
発行　〒388 長野県大町市大字大町八〇五六―一
大町山岳博物館
TEL〇二六一―二二―〇二一一
印刷　大糸タイムス印刷部
年額　一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
定価
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三一九三